
サラブレッド、世に憚る <改訂版>

乾燥グリフォン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

サラブレッド、世に憚る <改訂版>

【Nコード】

N0364V

【作者名】

乾燥グリフォン

【あらすじ】

「実は儂、魔王なんじゃ」 「実は俺、勇者なんだ」 「・・・へ？」

誕生日に師匠から突然告げられた衝撃の真実。思考を整理する間もなく、獣人の少女カレンは妙な指輪を渡されて、彼らの息子と共に冒険者になって来い、と師匠に村から一方的に追い出されてしまう。それと時を同じく、ジークを狙って幾多の組織が動き出す！

様々な思惑が絡み合う、覇権を巡る争いに巻き込まれた不幸な少女が真に平穩を手にする日は来るのか！？

<10/22> 生活環境の変化に伴い心機一転、再スタートします。てな訳で投稿済みの話もちよこちよこイジっていきつつ、投稿をしていきたいと思えます。よしなに。

ぶろろーぐ（前書き）

ストーリーを大幅に変えて再投稿。拙い文章ですが、目を瞑るかご指摘して頂けると幸いです。

ぶろろーぐ

多岐に進化した人類と？穢れ？に侵された魔獣が数多く住まう大地、<ワンダル大陸>。
今この地で人と魔族との戦争が終わりを迎えようとしていた。

「…満身、創痍じゃな、勇者よ」

「キミも、だろう？魔王」

美しい緑の丘が見る影もなく荒野と化した戦場で、傷だらけの二人の男女が切っ先を向け合いながら笑う。

「結局、決着はつかんかったのう。口惜し^{ケリ}や」

「言葉の割に、満足そうじゃないか」

「互いに全力を出し切ったんじゃ。それで満足せん奴は欲に塗れた銭ゲバぐらいのモンじゃて」

「フフ、そうだね。僕もすっかり空っぽさ。とても清々しい気分だ。」

「カカカツ！ 美しき自然を荒れ地・盆地にしておいて、清々しいか。我らはなんと自分本位なんじゃろうなあ」

黒髪の美しい少女、紅魔王は自嘲気味にからからと笑う。

「皆、自分本位に生きてるさ。魔族も、人族も。…だから、こうして交えたくない剣を交える事にもなる」

「他人の我儘故、か。魔王の肩書をもつても世はままならぬな。
…勇者よ、割に合わぬと思わんか？」

「え？」

「我らは何故、人の欲の為に殺し合わねばならぬ？我らもヒトだ。我欲を、意思を貫き、我儘に生きて良いのではないか？良いはずじゃ！否、良いのだ！儂が決めた！！」

突然、有無を言わせぬ熱弁を始めた魔王に勇者は呆氣にとられ、思わず嘖き出した。

「アハハツ！相変わらずだね、キミは」

「お主もそう思わんか！？我らばかり人の都合に振り回され、理不尽なのじゃ！我らには自由を得る権利があるはずなのじゃ！」

魔王は長年溜まりに溜まった鬱憤を叩きつける。

勇者も、心のどこかでそう思っていた。

どうにもならないと、思っていた。

しかし、何故だろうか、彼女の言葉に勇気が、希望が湧いてきた。

「そう、なのかな」

「そうなのじゃー!」

彼は覚悟を決めた。

「……そうだね。そんなのも、良いかもしれない」

「うむ、よいのじゃ」

紅魔王は満足そうに頷く。

剣を収め、しばらく見つめ合った二人は、どちらともなく歩みを進め、少しずつ距離を詰めていく。

「やれやれ、父上には多大な迷惑をかけるのう。魔王が職務放棄など前代未聞じゃて」

「後でみんなや師匠に謝らなくちゃ……うう、すごく怒られるだろうなあ……」

「くくく、心配するな。僕も一緒に謝ってやろう」

「……うん、ありがとう!キミと一緒になら、何も怖くないよ」

互いの距離まで十歩、……五歩、……一歩。
そして、手を取り合う。

――閃光

二人の姿は掻き消えた。

そして時は流れ……。。

〽15年後〽

――ゴルド帝国南・ヴァイオレット領西部 泉の森――

ガサガサ… ガサガサ…

「あつっ… ここにも無いか…」

「おいカレ〜ン、もう昼だぜ〜？諦めて帰ろっぜ〜…」 「がっ」

既に日も高い。森に入ってからこれ4時間つてところか…

「う〜ん、おつかしいなあ…。去年はこの辺りに群生してたんだけど…」

今朝方あたしはママに、幼馴染のジークと二人で泉の森まで薬草を取ってくるよう頼まれた。

その時は、久しぶりに朝の鍛錬をサボれる口実が見つかったんでラッキー！、と思ったんだけど…これだよ。

森の中は湿気が多いし、照りつける太陽がうらめしい。

はあ、ついてない。

「朝一から探して見つからねえだから、じゃあねえだろ〜？」

「朝の鍛錬サボってまで来てる手前、手ぶらで帰れないわよ。後で師匠にどんな追加メニュー増やされるか分かったもんじゃないわ」

「薬草なら市場でも買えるじゃねえか、早く帰って飯にしょーぜ」

「が〜っ」

「ボブル草は魔獣の多いここらにしか生えてない希少品種よ？そうそう出回らないわ」

「あちー！暇ー！腹減ったー！」 「がー！うー！がー！」

「ええい、うつとおしい！そんなに暇ならジークも薬草探し手伝いなさい！」

「だって俺薬草の種類とかよくわかんねえし」 「がう」

「分かんなくても良いから手伝いな……あー、そうだった、あんたにモノ頼むと碌な事にはならないんだったわ」

あまりの暑さに忘れてたわ。

こいつは絶対何かをやらかす《……》奴だ。

前に手伝わせた時なんか、草と間違えて？樹竜？のしっぽを思い切り引つ張つちやって怒らせたんだつたっけ。

もう二度とあんな目に会うのは御免だ。

「ぬ！失敬な！俺がまるでトラブルメーカーみたいじゃねえか！」

「がう！」

「事実そうでしょうが。……で、それ、何？」

…さつきから気にはなっていた。

ジークが乗っている物体が。

ただ確証を得るのが嫌だったから、敢えて聞かなかった。

でも聞いとかなないと、命にかかわる気がした。

「？ さつき拾った」 「がう。」

「……拾った？」

赤い艶やかな鱗、

背中ではびよこびよこ動く小さな羽根、
くりつとした大きな眼に鋭い牙。

わあ、なんて可愛らしい火竜の赤ちゃん♪

『ギャオオオオ………ウン!!!!!!!!!!』

森中に凄まじい怒りに満ちた魔獣の咆哮が響き渡る。

「お前は何やつとんじゃあああああああ!!!!!!」

今回はうっかり火竜の子供誘拐^{バク}っちゃいました ってパターンかあ
あ!!

「こいつが勝手について来たんだよ」「がうゝ(すりすり)」

既にかなり懐いてしまっている。

これはマズイ。

「いいから！親に気付かれる前に返してきなさい……!?!」

突如嵐のような風が吹き荒れ、目を開けて立っていられなくなった。
ほどなく風が和らぎ、頭上を飛ぶ影を見上げると、そこには眼を血
走らせて明らかに怒り心頭プツンな、巨大火竜の姿があった。

手遅れ、なんですネ……

つくづく、己の不幸を呪う。つーかジーク《コイツ》の所為だが。

「うおーっ！でっけえ！ カレン！あれ乗って帰ろう！」

「乗るかあ！！どう見てもやつこさん敵意ムキ出しでしょうが！」

「えゝゝゝんじゃ、？ミケ？に乗って帰るか」

ジークは火龍の子供をつんつんと指差す。

「（何で赤一色なのにミケ…）もれなく怒り狂った親の火竜もついてくるわあ！！！」

「おゝい！お前も一緒に帰るか？」

『ギャオオオオオン！！！！』

「話聞けえ！！ あんなの村に連れ帰ったら火の海になるわ！この森の中で撒くわよ！」

『グアオオオオオーン！！！！』

火竜は空から此方目掛けて突っ込んできた！

あたしはジークの襟首を掴み、茂みに飛び込むようにしてこの場から猛ダッシュで離脱した。

「あーもー！毎度毎度、何であたしがこんな目に…！」

どっすどっすどっすどっす……

「ん!？」

背後から聞こえる重い足音に振り返ると、すぐ後ろに小さな羽をパタつかせながら走るミケがいた。

「がうー」

「ちょ!？ あんたはついて来なくて良いのー!！」

すっかり懐いてしまったジークを追いかけて、ミケまでついて来てしまった。

そして当然、

『グギャオオオオオオオオ!!!!!!!』

子どもを返せ!と親御さんも付いてくる。

「いやあああああああ!こっちくんなあー!！」

「がうがうー」

『ギャオオオオウン!!!』

チキショー!どうしてこうなった!？

元はと言えばジーク《こいつ》の魔獣の子どもに好かれる体質が原因だ。

何じゃそのふざけた体質!巻き込まれるこっちは溜まったもんじゃない!

これ以上、愛する故郷に厄介事トラブルを持って帰ってたまるか!

なんとしても振り切る！と決心して後ろを振り返った瞬間。

『グギャヴ！！！？』

「へ！？」

突然、火竜が地面に叩きつけられるように落ちた。辺りにビリビリと下へ押さえつける力を感じる。

「これは…重力操作魔法？・・・」

うつ伏せになった状態から身動きが取れないらしく、こちらを睨みつけたまま動けなくなった。

グラビティ・バインド
この技は、『重縛』…

？師匠？の十八番だ。

「てことは…」

「帰りが遅いと来てみれば、何をやっとなるんじゃ…」

馴染みのある声に上を見上げると、空から長い黒髪を靡かせながら一人の美女が舞い降りてきた。

「師匠!？」

「あれ、母ちゃん。なんでここに居るんだ？」

「ジョンの奴が、カレンの帰りがあまりに遅いと騒いでおったのでな。まったく、あ奴の娘バカにも困ったもんじゃ」

あんまり騒ぐんでちよいとめてから来た、と悪びれる様子も無く言う。

パパエ…

「んで、一体お主ら何を…、成程、大体理解した」

師匠はジークにすり寄る火竜の子どもを見て、事情は大体察したようだ。

「しかしカレンよ。ジークは当然として、主でも火竜一匹ぐらいどうとでもできるじゃろうて。何故態々逃げる？」

「面倒事を起こしたくないんですよ。火竜一族とのイザコザなんて真っ平御免ですから」

あたしは平穩無事に生きたいのだ。

「相変わらず事なかれ主義じゃのう…。まあ、主の言い分も一理ある。儂があ奴を静めてやろう。バカ息子の所為でもあるようじゃしの」

「お願いします」

師匠は睨みつばなしの火竜の前に行き、落ちつくよう説得を始めた。

『グルルルルル・・・』

「…じゃから此方に害意は無い。事故のようなものじゃ。冷静に、大人の話し合いで場を収めようぞ」

『ギヤオオオオオウ！！！！』

「じゃから、とりあえず落ちつけ、話を」

『ギヤアオオオオオウ！！！！』

「聞け、話」

『グギヤオオオオオウ！！！！』

「聞けと言うところがア！！！！」

ズドオン！！！！

『グギャン！！？』

「……………」

……………ぶん殴った。

「全く、人が下手に出ておれば付け上がりおつて！ … あー、コホン、ほれ、静めてやったぞ」

「ええ、地面にも沈めてますが」

大人の話し合いはどこいった。

「まー、細かいことは気にするな弟子二号！ カツカツカツカツ！」

顔を地面に突き刺してピクリとも動かない火竜。
空の王者がなんと無様な姿に。

何も子どもの前でやらんでもいいでしょうに…

「ミケ、お手！」

「がう！」

まるで見ちゃいねえ。

少しは親の心配してあげなさいよ。

… まあ何にせよ、師匠が来てくれて助かった。

「さて、帰るか。ジョンの奴が目を覚ます頃合いじゃし。その様子じゃと薬草は見つからなかったようじゃのう」

「はい、残念ですが」

「ボブル草なら後で火竜王のじじいからカツアゲしておくわい。気にするな」

いや別の意味で気になるんですが…

「母ちゃん、腹減ったー」「がうー。」

「分かった分かった。昼飯は用意してある。では、帰るか。？
転移？」

あたし達は一瞬で村に着いた。

「カレエーン！！！！！」

「うわっパパ！？」

転移した先にいたパパが抱きついて来た。

「良かった無事で！怪我は無いか！？」

「う、うん。あたしは大丈夫だから」

パパは抱きついて中々離してくれない。
ええい、鬱陶しい。

幾らなんでも心配し過ぎでしょう。

あーあ、涙と鼻水でせっかくのナイスミドルが台無しだ。

「はいはいそこまでじゃ。カレンも疲れておるんじゃ。早く休ませてやれ」

ゾクッ！

…なんか、師匠が妙に優しい。

普段ならどんなにボロボロでも無理矢理鍛錬へ直行、なんてザラなのに。

「ん？なんじゃカレン。怪訝な顔して」

「いえ…別に」

「今日はゆつくり休め。夜と明日の鍛錬も無しにする」

ゾクゾクッ！！！！

怪しい！絶対何かある！！

「あの、師匠？…もしかして、明日何かあるんですか？」

「ん？ああ。明日のお楽しみじゃ」
♪（ニヤリ…）

「

その晩、あたしは眠れなかった。

ぶろろーぐ（後書き）

かなり内容に悩みました。

しつこくない程度の文章で伝えるべき事を伝えるって、難しいですね。

<余談>ミケのその後は閑話で出す予定です。

#1 サラブレッド、野に放たれる（前書き）

ほぼプロローグな第一話です。

7 / 2 2 誤字修正 カイン↓アイン

#1 サラブレッド、野に放たれる

「えーと、つまりどういうことだってばよ？」

いかんいかん、寝不足で幻聴が聞こえる。

「じゃから言うつろうが。儂が魔王で、アレクが勇者じゃと」

ふむふむ、師匠が魔王で、旦那のアレクさんが勇者で、ジークはその子どもと。

・
・
・
・
・
・
・

「んなんじゃそりゃああ――――！！！！！！」

□ □ □ □ □

――時は少し遡る。

「カレンちゃん、さっきイスさんが家に来るように言ってたわよ？」

「……師匠が？」

寝不足気味に朝食を摂っていると、ママが師匠からの伝言を伝えてきた。

「カレンちゃん達、今月誕生日でしょう？何かプレゼントがあるそうよ」

あたしとジークは誕生日が近いことで、一緒にお祝いされることが多い。

にしたって、こんな朝っぱらからプレゼントってなんだろう。

朝食を手早く片付け、お隣のジークの家に向かった。

「行つてきまーす!」

「「いつてらっしやい」

「…もう、そんな時期なのだな」

「大丈夫よ、あの子なら。きっと何があっても乗り越えていくわ。
私とあなたの子だもの」

「そう、だな。…あの子がいないと、この家も寂しくなるな」

「…ええ、そうね」

「…母さん、牛乳おかわり」

「はい、あなた」

「おはようございまーす！」

「お早う、カレンちゃん。…昨日ちゃんと寝たかい？」

「あれ？アレクさん！何時こっちに帰って来たんですか？」

アレクさんは師匠の旦那さん。ジークのお父さんだ。
普段は村の外でよく分からない謎の仕事をしている。

「今朝方の夜明け前だよ。久しぶりだね。しばらく見ないうちにまた綺麗になったね」

「もう、アレクさん。お世辞はよしてくださいよう」

アレクさんみたいな超絶イケメンに、白い歯を光らせながら褒められるとさすがに照れてしまう。

ジークとは見た目瓜二つなのに何だろうこの差は。

「あははは、カレンちゃんは自分にもう少し自信を持ちなよ。あ、そうそう。イースー、カレンちゃんがきたよー」

アレクさんは二階に居るであろう師匠に声をかける。
しかし聞こえるのは返事ではなく喧騒だった。

『いい加減に起きんかジーク!』

『まだ眠いよ…』

『今日は大事な話があると言つとろつが!』

『別に大事じゃない。俺が決めた』

『勝手に決めるな! いいから起きんかーい!!!』

ズガァー……ン!!

…二階からジークが床を突き破って落ちてきた。

「いててて… あれ、父ちゃん帰ってたのか。おかえり」

「ただいま。相変わらずだね、我が家は」

「何で嬉しそうなんですか…」

「あ、カレンおはよう」

「はい、おはよう。あんたもいい加減懲りなさいよ。その内家が無くなるわよ?」

「全くじゃ」

階段から師匠が降りてきた。

「いや、壊した本人が言いますか」

「細かいことは気にするな。それより、主らに大事な話があるのじゃ」

まあ座れ、と促され居間の椅子に座った。

「実はの、儂は魔王なんじゃ」

・・・はい？

「んで、旦那のアレクは勇者じゃ」

「あはは、実はそうなんだ」

・・・はい????

冒頭に戻る。

□ □ □ □ □

「落ち付いたか？」

「え、ええ。まあ」

んなこと聞かされて落ちつけるかあ！

までまで、現代の魔王と勇者は15年前に戦争で死んだはず！

でもそれが生きていて、子どもをこさえて今はあたしの師匠と。

なるほどそうゆうことか……て受け入れられるかア！！

人魔戦争は二人が相打ちで死んだってことでやっとこさ終戦したのよ！？

こんなの世間にばれたらどうなるk……！？

そんな大事なことをあたしに打ち明けたということは…

「なんかヤバいことに巻き込まれたアアアアアアアア！！！！！！（ガタッ）」

「ええい、喧しい。とにかく座れ。本題はこれからじゃ」

「まおーとゆうしゃって、昔話のあれか？」

「僕は二代目勇者で、イースはお話の魔王の末裔だけどね」

ジークはふーん、とまるで気にした様子がない。

そして未だテンパってるあたしを無視して師匠は話を続けた。

「んでじゃ。大体察しはつくであろうが、妾とアレクより、ジークの存在はこの世にとって非常に危険なものじゃ」

はっ、と気付いた。

魔王と勇者は世界に二つ限りの？特異点？だ。

その間に生まれたジークの力は、将来確実に世界を動かすものになる。

この力を利用しようとする輩は必ず出てくるだろう。

「幾らこの村が田舎で、儂が認識阻害の結界を張っているとはいえ、強大すぎる力はいずれ世にばれる。ならば、ここに永く留まるのは好ましくない」

…確かに。

あたしはこの静かな村が大好きだし、ママとパパを争いに巻き込むのは嫌だ。

でも、それだと・・・

「ジークを、村から追い出すんですか？」

それはあんまりだと思う。

しかし師匠はニヤリと笑い、首を横に振る。

「追い出すのではない。解き放つのじゃ」

「？」

「言っただじやろう、いずれされると。村に居ようが、外に居ようが

それは変わらん。じゃったら、此方から堂々と世間に登場させてみようと思ったのじゃ」

横のアレクはやれやれと言った顔をしている。

「どういふことです?」

あたしが問うと、師匠はカッと目を見開き、言い放った。

「ジーク!カレン! お前達はこれから冒険者となり、世界を思存分掻き回して来るのだ!」

…は、

「はあああああああ!?!」

「うおおおおおおお!?!やった!?!」

「何もこつちが掻き回さなくてもいいと思うんだけど…」

「胸糞悪い奴らに振り回されるより、儂らがそ奴らを振り回してやる方が爽快じゃろう?くつくつく!」

え、そんな理由!?
いやそれより!

「ちょ、ちょっと待って下さい！何であたしも！！？」

「お主、どうせジーク一人を外に出すのが嫌で付いてくるじやろう？ この世話好きめが」

「うつ… た、確かにコイツが世間で何をやらかすか考えただけで気が気でないですが…」

「じゃからフォロー役として行って来い。ジョン達には既に了承を得ておる」

「！ そつか、それでパパ達どこか寂しそうだったんだ…
つていやいや！普通本人の意見を先に聞くもんでしよう！？」

「母ちゃん！オレ、ホントに冒険者になっていいのか！？」

「おう、良いとも。存分に暴れてこい」

「そつえばジークは冒険者に憧れてたね。頑張っておいで」

「応！」

ジークはやる気満々に応える。

あああ、なんでこんなことに…

あたしは平凡に、平穩に生きたいのに…

「まあそれはさておき、お主らにプレゼントじゃ。受け取れ」

さておけねエよ。

…ああそつえば、そんな用件だった。忘れてた。

師匠からくすんだ藍色の小さな箱を受け取ると、中にはピンクパール色のシンプルな指輪が入っていた。
ジークも同様の、白金の指輪だった。

「？ 師匠、これは？」

「いいから、着けてみい」

言われるまま、あたし達は右手の中指に指輪をはめた。

「「！」「」」

すると指輪が淡く光りだし、二人を包み込むと、暖かい光が体に染み込むように消えていった。

『つかあ~~~~~！！ やつと出られたぜえ！！』

『待ちくたびれたっす~~~~』

「「！？」」

突然、指輪から異様にテンションの高い男と女の声が聞こえた。

「師匠、何なんですかこの指輪！？まさか精霊憑き！？」

「うおー！なんだこれ、おもしろー！！」

『おうおうてめえら、初対面の相手に挨拶も無しとは、どういう教育受けてんだ？』

『アー君、指輪がいきなり喋ったら普通ビックリしちゃうつすよ？』

『あー、そりゃそうか。んじゃ気を取り直して。俺の名前はアイン。ヨロシクな、三代目！』

『アマリリスっす！ リリーって呼んで下さいっす』

ジークの指輪はアイン、あたしのはアマリリスというそうだ。あたし達は簡単に自己紹介を済ませて師匠に事情を聞いた。

「そ奴らは意志ある武器、魔道具じゃ。詳しい事は本人達に聞け。知識も豊富じゃし、困ったことがあれば相談すると良い。伊達に千年生きておらんからの」

千年！？

こりゃまたエライ骨董品だなあ。

『レンちゃん、骨董品は酷いっす』

「へ？もしかしてあんた、あたしが考えてる事、分かるの？」

『あんたじゃなくてリリーっす！ 表面的な思考なら分かるっす！頭の中で念じてくれれば言葉にしくても意思疎通も出来るっすよ！』

リリーは可愛らしい声で元気に答える。

ふーむ、それは便利だ。

指輪に話しかける姿なんて、明らかに不審者だし。

「では、そろそろ出発といくつかの」

唐突に、師匠は床に？転移門^{ゲート}？を開けた。

「え！？ちょ、そんないきなり…」

「うっしや、何時でも良いぞ！」

「必要な荷物は向こうに置いてある。少額ながら路銀もある。当面はそれで何とかせい」

「イヤなんとかって、とりあえず心の準備を…」

「カレン！先行ってるぜ！」

『あっはっはっは！三代目は行動力がハンパねえな！こりゃ楽しくなりそうだ！』

おろおろするあたしを尻目に、ジークはとっとと転移門の中へ飛び込んでいった。

「ああそうじゃ、ほれ」

師匠にメモをちぎったような小さな紙切れを渡された。

それには小さく、『免許皆伝 カレン♡ハート』と書いてあった。

「ちょ、こんな大事なもん、もうちょっと格式ばって渡してくれませんか!？」

「別にいいじゃろ、飽くまで仮の免許皆伝じゃし。いいからとつとと…行って来い!」

「ちょ、うわ、押さなああああああ……」

『行ってくるっす〜』

こうして、あたし達の旅は始まった。

#1 サラブレッド、野に放たれる（後書き）

会話率高いなあ…

もう少しバランス取れるようにしたいです。

登場人物紹介

ネタバレ多し！（前書き）

随時更新します。

登場人物紹介 ネタバレ多し！

〈帝国 side〉

<カレン〃ハート 女 主人公>
15歳。

ショートの赤毛に琥珀色の瞳をした、獣人族と人間族のハーフ。幼少の頃から（ジークのせいで）あらゆるトラブルに巻き込まれていた為根性が据わり、かなりの男勝りになってしまった。

本気モードになると半獣化し、狼の耳と尻尾が生える。

性格は事なかれ主義だが、本人も呆れるほどの面倒見の良さからジークらの引き起こすトラブルに自ら介入することもしばしば。

魔術と剣術に長け、母直伝の製薬技術と治癒魔法も得意である。

<ジーク〃ホワイト 男 主人公>
14歳。

金髪碧眼の美少年。でもアホ。

夢は『冒険者になって世界を見て回ること』。

両親が魔王と勇者という、特異過ぎる境遇で生まれたサラブレッドの中のサラブレッド。

母親そっくりの豪胆さと行動力で、周囲の人間（主にカレン）をトラブルに巻き込むことは日常茶飯事。

戦闘スタイルは基本剣か拳の力押したが、奇策や状況に応じたスタイル変更など柔軟な発想を持ち合わせている。

<イース〃ホワイト 女 元魔王>

旧名・イース〃グランローズ。かつての二つ名は『紅魔王』。

魔界唯一の魔族国家『ローグ魔国』の元・第37代魔王。

美しい黒髪と紅い瞳を持つ妙齡の美女である。

歴代魔王最強と言われた『凶魔王』の血を最も濃く受け継いだ、稀代の天才。

アレックスとは今だ新婚気分で、人目も憚らずいつもイチャついている。

<アレックスⅡホワイト 男 二代目勇者>

愛称はアレク。金髪碧眼の美中年（どうみても美青年）。

孤児の生まれで、幼いころから老エルフの元で修業を積み自身を鍛え抜いた結果、勇者として覚醒した。

大らかで人が良く、大抵の事は笑って許してしまう器のでかさを見せる。

家族や友人の危機には敏感に察知する。

<レインⅡハート 女 元帝国騎士団>

カレンと同じ赤毛のおっとり系美女。

かつては帝国騎士団の医療チームに所属していて、『癒しの女神』といわれるほどの名医だった。

現在は村の薬剤師として働いている。

但し台所に立つと『厨房の錬金術師』という二つ名に変わり、数々の斬新な料理を生み出しては屈強な兵士たちの胃袋を虐めた。

夫ジョンとは戦場で会い、恋仲になる。

<ジョンⅡハート 男 元魔国近衛騎士団長>

旧名・ジョンⅡグレイコート。

灰色の髪に琥珀色の瞳をしたナイスミドル。

放浪を主とする獣人の中では珍しい、国に所属する狼の獣人。

ローグ魔国の元近衛騎士団長として、魔王族のイースとは古い付き合いがある。

半獣化すると全身が灰色の毛で覆われ、『全種族最速』の称号を

具現化させる。

家族との時間を最も大切にしているが、最近娘のカレンの素っ気ない態度に少々凹み気味。

#2 子の心、親知らんぷり（前書き）

前話にて、ジークの指輪の名前を間違えてました。すみません。
正しくはアインです。

#2 子の心、親知らんぷり

——ゴールド帝国・帝都バーシル

「…来たか、勇者」

「！！ では、あれが再び…！」

「ああ、聖剣が現れた」

「おお…！ ついに、遂にあの恩知らずな貴族どもの鼻をあかし、再び我らの栄光を取り戻す時がやって来たのですね！」

「ああ…その為には先ず、奴の聖剣を手に入れねば話にならん。何としても勇者を探し出すのだ！」

「…はっ…！」

「…待っている、新たな勇者よ。貴様が英雄の時代はこれまでだ！」

——ゴールド帝国西・ループ地方

「…来た」

「漸くですか。十四年…随分と待たされましたね」

「…まだ、不完全」

「判っていますよ、焦りは禁物です。ですが、接触自体は早くても良いかもしれませんよ？ 仲良くなるに越したことは無いんですから」

「…期待、しない方がいい」

「彼以外、誰に期待しろというんです？ ンフツツ、これからどれほど成長してくれるのか、楽しみですねえ」

「…笑い方、気持ち悪い」

「ガーン!? ひ、酷い! この完璧紳士パーフェクトに向かって気持ち悪いだなんて、あんまりです!」

「…鬱陶しい」

―魔界・ローグ魔国

「…!? この波動…まさか、イース様の…!」

「如何なされました、閣下」

「あ、いや、何でもない。ミーティングを続けてくれ」

「はっ」

「(ついにこの時が来たか…。…拙い! 今奴らに御子息の存在を勘付かれでもしたら、この国は再び…! こうしちや居れん!!) 諸君、すまない。急用を思い出した。エニル補佐、あとは頼む」

「え!? ちょっ、將軍閣下!?!」

——大陸東・光の高地／白竜の里

「白竜王様！　白竜王様！！」

「何じゃハーヴェス、朝っぱらから騒々しい。お前の甲高い声で一度呼べば太陽にも聞こえるわい」

「暢気なことを言ってる場合では御座いません！こ、これをご覧ください！」

「何じゃ電報か？…ふむ、火竜王殿からか。……………な、何じゃと！！？これは真か！」

「はい、既に紅魔王殿にも確認済みです」

「…ええい！あの小娘は一体何を考えておる！争乱の種を自ら野に放つなど、あ奴は世界をひっくり返す気か！……ああ目眩が」

「白竜王様…」

「はあ…ワシ一人で憂いておる場合ではないな。カクシン！」

「はっ」

「サスケ！」

「はっ」

「全竜王に通達、緊急竜王会議を行う！！」

「「ははっ！！」」

——？？？

「ふーん、自分から出てきちゃったんだ。てっきり一生引きこもってるのかと思ってたよ」

「はい。ですが、まだ完全に特異点としての力に目覚めたわけではないようです」

「いや、それは時間の問題だよ。？彼ら？が居るなら特に、ね」

「では、我々はこの様に」

「んー、暫くは待機しといて。彼にはまだ？試練？は早そうだ」

「御意」

「ふふふ、今度はきつと、今まで以上の素晴らしい花を咲かせるに
違いない。ああ待ち遠しいなあ」

「……ああああああ痛あー！！」

『とーちやくつすっ』

ゲートに放り込まれたままの恰好で落ちたあたしは、埃まみれの床に思い切りお尻をぶつけてしまった。

「ゲホッゲホッ！ くっっ、いててて…」

『大丈夫っすか、レンちゃん？』

「う、うん。ありがとうリリー。にしても何ここ？ 凄い埃… へくしよん！」

暗くてよく見えないが、どうやらどこかの古小屋の中に出たようだ。

「うっ…、あれ、ジークは？」

小屋の中には居ないようだ。

『この外に居るようっすよ？ 右の壁に扉があるっす』

確かに右方に扉の隙間らしき光が見える。手探りで足元に注意しながら壁を伝っていくと、取っ手に手が掛かった。

幸い鍵は掛かっておらず、すんなり外へ出ることができた。

「っ、……………！」

急に明るいところへ出た所為で目が眩むが、徐々に見えてきた景色に思わず息をのんだ。

「……綺麗…」

そこは、遠く果てまで広がる緑の丘の上だった。

せまい故郷から殆ど出た事の無かったカレンにとって、その雄大な景色は一生忘れられそうにない、感動的で、美しい光景であった。

「おい、カレン！見ろよあれ！」

茫然としているあたしの左方から鞆を背負ったジークが何か指をさして叫んでいる。

「……！ すごい……！」

そこにあつたのは、とてつもなく大きな街だった。

周囲を高い壁と堀で円く囲まれていて、中の色鮮やかな街並の中央には城のような大きな建物が見える。

此処からは全体像は見えないが、均等な感覚で跳ね橋と門が見受けられることから察するに、東西南北とその間に各々、計八つの入り口あるようだ。

そこからは、故郷では見たことのない数の人間と荷馬車が絶え間無く行き来していた。

「大きな街ね……」

『つか、帝都だなありゃ』

帝都！？

あれが、帝都バーシル……！
通りででかい訳だ。

「カレン！早く行ってみようぜ！」

たしたし、と足踏みして急かすジーク。

見たことの無い巨大な街にワクワクを隠せないようだ。
実はあたしも内心、初めての都会に興味津々だ。
はやる気持ちも分かるが、その前に。

「ちよつと待つて。先に荷物の確認をしましょう。所持金も分からずに動けないわ」

ジークから大きな鞆を受け取り、中身を開けた。

中には衣類と少量の携帯食、ナイフなどのサバイバルキット一式、医療道具や製薬道具、お金、そして一通の手紙が入っていた。

それには達筆な字で？カレンへ？と書いてあった。

「……パパとママからだ……」

きれいに折り畳まれた書面を拡げると、仄かに薬草の香りがした。

『カレンへ。』

この手紙を読んでいるということは、もう帝都にいたのでしょうね。急な話に驚いているでしょう、黙っていて御免なさい。幼い頃から、治癒魔法や製薬技術を貴女に学ばせたのは、この日が来たときの為です。私の跡を継いで薬剤師になると言ってくれた貴女の気持ちを裏切ることになってしまい、申し訳なく思っています。

ですが母と父は、貴女に広い世界を知ってほしいのです。色んな所へ行き、色んな人に出会って、貴女の歩むべき道を自らの手で探し出して思うまま、自由に生きて貰いたい。それが私達の願いです。道中、苦しい時も辛い事もあるでしょう。逃げ出したくなる事もあ

るでしょう。

それでも負けないで下さい。貴女は、私達の誇りなのだから。』

愛しい娘へ　　く　　レインハート　ジョンハート　く

「……………」

パパ…ママ…

はあ…誇り、ですか。

まったく、ズルいなあ。

こんなの読まされたら、腹括るしかないじゃない。

『追伸　ちよっと二人で温泉旅行に行ってきます（はあと）』

「…本命はこっちかよ……orz」

『仲がよろしくて羨ましいっすく』

この緩んだ涙腺どうしてくれんだ…

はあ…何にせよこうなった以上、こいつが面倒を起こして目立つような事態をどれだけ回避することが出来るかがあたしの生命線だ。

いよし！なんとしても生き延びてあたしの夢、平穏無事な生活を手に入れるぞ！

『えらく夢のない夢っすねえ…』

あたしにとつちや遠い夢なのさ…（ほろり）

『…苦勞してるんすねえ…』

「なんだ、武器とか入ってねえのか？（ガサゴソ）」

いつの間にやらジークが携帯食を齧りながら鞆を漁っていた。

どうでもいいが、非常食って何で買ってすぐに食べなくなるんだろう。

「うん、そうみたいね。思ったよりお金が多いし…、これで買え、つてことかしら」

半分を宿代として、諸々の出費を考えると買えるのは精々中古の安物だろう。

『武器なら俺達がいるぜ？なあ？』

『ハイっす！結構すごいんすよ！？』

「そっぴゃ、母ちゃんが？意志ある武器？とか言ってたな。どういう事なんだ？」

『ああ、それはだな…』

うーん、話が長くなりそうだな…

現状を考えると、そういう話は後回しにした方がよさそうだな。

「はいちよつと待った。とりあえず今は帝都に行つて、拠点となる宿を確保しましょう。お互いの事を話し合つのはそれからでも遅くは無いでしょう?」

これからどうするか、何をするか、どう生活していくか。他にも話す事は山積みだ。

「それもそうだな!　んじゃ、帝都に向かつてしゅっぱーっ!」

『『オー!?!』』

「だあゝもー!　一人で勝手に行くな!」

#2 子の心、親知らんぷり（後書き）

ちよつと短いですがキリが良いのでこの辺で。
書きたい話がたくさんあるので早く話を進めたいです。

#3 出る杭は打たれる前に引っ込める（前書き）

話が進まぬ…

#3 出る杭は打たれる前に引っ込める

「…やっと着いた…」

『お疲れさます、レンちゃん』

「だらしないぞ、カレン」

『いや、この距離を全力疾走して息一つ乱してない三代目がタフなんだって』

やっと跳ね橋の前辺りまで来た。

丘の上から見た時は近く見えたのに、いざ向かってみると二時間も歩き通しだった。

帝都が巨大すぎて錯覚していたようだ…

「つーか、女の子に荷物持たせて先に行くんじゃないわよ！」

製薬道具なんかは壊れやすく高価なものばかりなので走って運ぶよ
うな荒い扱いはご法度なのだ。
なのにこいつときたら…！

「うひゃゝ、でっけえ門だなゝ！」

『まるで聞いちゃいないっすね…』

「はあ…もう慣れたわ」

『プツ、ククツ…苦勞してんなあ、お嬢』

何笑ってんだ装飾品、溶かすぞ？

『すいませんでしたあ！！！！』

『…アー君、離れてても念話できるようになったっすね…』

止めなかったあんたも同罪だっつの…

…？

あれ、何か違和感が。

「そーいや、何で橋に誰も居ねえんだ？」

そうだ、人影が無いんだ。

丘の上から見た時は門から大勢の人が出入りしていた。
まだお昼前だというのに、ということだろう。

『あ、兵隊さんが門を通せんぼしちゃってるっす』

本当だ。

鎧を身に纏った兵士達が横一列になって門の入り口を塞いでいる。

『敵意、とまでは言わねえが、強く警戒してやがるな。一応用心した方がいいだろうぜ』

「ふーむ、何かあったのかな」

少し装いが違うことから恐らく部隊長か何かだろう人が、兵士達に何やら指示を出している。

やはり、何か物騒な事があったようだ。

あたし達が橋の向こうからその様子を窺っていると、部隊長（仮）が此方に気付き、声をかけて来た。

「おーい！その君達ー！街に入るなら早く来なさい！」

大きく手を振ってこっちに来るよう手招きしている。

「よく分かんないけど、指示に従った方がよさそうね」

あたし達は荷物を抱え、急いで橋を渡った。

「急かして済まない。君達の他には誰も居ないかい？」

「はい、あたし達だけです」

声をかけて来た部隊長（仮）は意外にも若い青年だった。しかしキレのある動きは中々に練磨されていて、いかにも仕事ができる人って風貌だった。

「もしかして君たちは南から来たのかな？」

「はい、ウォツカ村という所です」

「ウォツカ村：聞いた事無いなあ。…おっと、すまない。実は、君達に聞きたい事があるんだ」

優しい印象の部隊長（仮）は一転して真剣な表情で尋ねてきた。

「…はい？なんでしょうか」

「解る範囲で良いんだけど、ここへ来る途中何か騒ぎがあったり、強い魔獣が出たりっていうことは無かったかい？」

途中と言われても、あたし達は師匠の転移で此処まですっ飛ばされてきてるのでさっぱり分からない。

「すみません、ちょっと心当たりがないです」

「俺も」

「そうかい、いや、無いなら良いんだ。気にしないで」

気にしないでと言われても、気になるもんは気になる。

「あの、何かあったんですか？」

「うーん、あったというか、あるかもしれないってとこだね」

「「？」」

「実は先程、南の方角から此方に向かう強い魔力が観測されたそう

なんだ。それで今、情報収集も兼ねて南門の警備を強化しているんだ。万が一の事も考えて入都審査は中で行っているよ」

成程、それで橋には誰も居なかったのか…

『（レンちゃん、レンちゃん）』

突然リリーが念話で話しかけてきた。

「（何？どうかしたの？）」

『（もしかしてその魔力って、ジークんの事じゃないっすか？走っていく時ちよつと魔力解放してたっす）』

……。

「ちよつと失礼」

あたしは部隊長（仮）に断りを入れ、メダカを捕えるヤゴの如き速さでジークの襟首をひっ掴んで少し離れた所でヒソヒソと耳打ちをした。

「ジーク、あんた暫く魔法禁止。いいわね」

「は？何でだよ」

「いいから言う通りにしなさい！あと街中で目立つようなマネはすんじゃないわよ！やったらご飯抜き！」

「?? だからなんで」

「返事!!」

「…わかった、ぜんしよする」

どうやら帝都ではこいつの魔力は危険視されるに十分なようだ。
厄介なことに巻き込まれる前に気配を抑えとかなきゃ。

「…どうかしたのかい？」

「! いいえ何も! オホホホ…」

『…お嬢、女々しい笑い方似合わねえな…(ぼそつ)』

どーという意味だコラ。

「そつ…あれ、君は獣人族なのかい? 珍しいね」

「え? はい、ハーフですけど…何で判ったんですか？」

耳も尻尾も出してないはずだけど。

「へ? 何でって…その瞳の色を見れば誰だって判るよ」

「瞳の色？」

「…本当に知らないのかい? 獣人族は皆、琥珀色の眼をしているんだよ」

へえ、知らなかった…

村で獣人はパパー人だったから、単なる遺伝かと思ってたよ。

「…その様子じゃ、この国での獣人族の立場も知らなさそうだから、注意しておくよ。一般の人は獣人に対して然程差別意識は持っていないんだけど、一部の貴族は蛮族扱いして蔑んだりしている。余計なトラブルを避ける為にも高貴な界限へはあまり近付かない事をお勧めするよ」

なんと！人種差別ときたか！

まさかあたし自身がトラブルの種と為りかねないとは露ほども思ってた。なかつた。

「それと、表通りから離れた人目の少ない路地も危険だ。俺達が厳しく検査していても奴隷目的で人を拐う輩が後を断たないんだ。特に獣人の女の子は高値で取引されていて狙われやすいから常に警戒は怠らないように。勿論、奴隷の売買は重罪だし、年々取り締まりは強化されているけどね」

うゝむ、来て早々都会の暗い部分を垣間見てしまったな…
幸先悪う…

「あ、ああ！気を悪くさせちゃったかな！？ごめんよ！それ以外は活気のある良い街だから！」

少し気落ちしたあたしの様子に部隊長（仮）は慌ててフォローをする。

「いえ、ご忠告感謝します。何分都会は初めてなもので、そうして

教えて下さると助かります」

「そう言ってもらえると此方としても助かるよ。あ、そうだ。お詫びと言っちゃなんだけど、この街の地図をあげよう。初めての人はよく迷子になるからね」

部隊長（仮）から貰った地図は、どこに何の店があるかが事細かに描かれた手書きのガイドマップだった。

イラスト付きでおススメの店なんかも紹介されている。
ラッキー！良い物もらっちゃった！

「ありがとうございます！」

「趣味で作ってるものなんだけど、お役に立てれば嬉しいよ」

うわゝ、この人、めっちゃいい人だ…

「アルフレッド隊長ゝ！ナンパしてる暇あったら、入都審査手伝つて下さいよゝ！」

「…！？ な…！バカ！職務中だぞ！幾ら好みのどストライクだからって俺がそんなことする訳無いだろう…！」

「隊長、自滅してます」

「相変らず隊長は初心だねゝ」

「ゝ…！！ いいからお前ら、持ち場に戻れ…！」

「『了解』」

ゆるいなあ…

こんなんで大丈夫なのか、帝都。

#3 出る杭は打たれる前に引つ込める（後書き）

次回やつと帝都入りです。

このペースだとどれだけ長くなるんだコレ…

Offstage・? 火竜王の災難（前書き）

ぷろろーぐと#1の合間の話です。

Offstage・? 火竜王の災難

——大陸南・赤き山脈／火竜の里

「——との事でした、今月の出産予定者は一名となっております」

「うーむ…。わかった。下がっていいぞ」

「ははっ」

俺様の名は火竜王。この世の全ての火竜の頂点に立つ漢だ。

？劫火の化身？と恐れられる俺様だが、一つ重大な悩みを抱えている。。

火竜の少子化だ。

元々竜は出生率の低い魔獣ではあるが、近年は特にひどく、何カ月も子どもが産まれてないなんてことはザラにある。

番いの数は決して少なくないはずなのだが…

俺様としても何か手を打ちたいのだが、未だ全く原因が分からず現状を見ている事しか出来ない。

ああ、くそう！！じっとしてゐるなんて俺様の性分じゃねえぜ！

………はあ。

…とはいえ俺様一人が足掻いてどうこうなる問題じゃないか。
とつと目の前の事務処理をしまおう。

『…！……、………！』

『……、………』

…ん？なんか廊下が騒がしいな…

『……ですから、急に来られても困ります！』

『気にするな、すぐに終わる用じや。茶菓子是要らん』

『いえ、そういうことではなく…！』

……この声は…まさか…

カツカツと響く靴音がこの部屋へと近づいてきた。
そして扉の前で音が止まる。

ドガアアアアアン！！！！

「おう、久しいのう火竜王」

やっぱこいつかぁ!!

「テメエ、イス！来るたんびに扉ぶっ壊して入ってくんじゃねえよ!!」

「僕はノックをただけじゃ。脆い扉が悪いんじゃ」

「オリハルコン製にでもしろってのかおい!？」

「んで今日来た理由なんじゃが、お主に話しておきたい事があつての」

「マイペースだなーテメエは!!」

「明日、倅を世に出すことにした」

「何だそんなこと言う為に此処まで来たのか!? 帰れ帰れ! 俺様は忙し忙しいii!!」

「相変わらず良いリアクションするのう、お主」

「ちょ、ちょ、ちょ、ちょっと待て!! お前の倅って、アレクとの子だろう!!」

「無論じゃ。僕はアレク以外の男になど興味は無い」

「!!! テメエ、自分が何言ってるかわかってんのか!? お前らのガキなんざ世に出してみろ! 人魔戦争推進派の貴族どもが騒ぎ出す

ぞーいや、それ所じゃねえ。この大陸の覇権を狙うあぶねえ奴らがこぞって動き出すぞー!!」

「だーいじょぶじゃてー（ほじほじ）」

「なんで呑気に耳掃除してんのお前!!?その余裕分けて!言い値で買うから!」

「儂とて息子をむざむざアホどもに利用させはせんよ。じゃが儂が手を下すまでも無く、邪な思惑は外れるじゃろつて。　　: お、でかい」

「: 何でそう言い切れる?」

俺様の問いにイースはにやりと笑い、言い放った。

「魔王と勇者の二人掛りでも手を焼いた奴を、一体誰が扱えるというんじゃ?」

「!-!」

: すげえ説得力だ。

てか、こいつらの倅どんだけヤンチャなんだよ!?

むしろ率先して戦乱を引き起こす、なんてことはねーだろうな...

「: はあ。とりあえず人間はそれで良いとしよう。良かねえけど。だが竜族はそんな危険因子、放っておかねえぜ?黒竜王の野郎が聞いたら直ぐに排除^ツしにかかるだろうよ」

「ま、なんとかなるじゃろ」

おいおい…

「はぁ…どうせお前の事だから止めたところで聞かねえだろうな」

「カッカッカッ、よく分かっておるではないか！ま、それはそれとしてじゃ。実はもう一つ用件があるのじゃ」

「今度は何だよ…」

なんかもう、凄く疲れたんだが。
早く済ませて帰ってくれ。

「ちよつと火竜の子を一匹預かりたい」

「…火竜の子？何でまた」

「実は今日、倅が泉の森へ行つた時に火竜の赤子に大層懐かれよつてのう。これも何かの縁と思つて鍛えてやろつかと思つたのじゃ」

泉の森…イジュール夫妻の縄張りだな。てことはそいつらの子か？

「うゝむ、俺様は別に構わねえが…お前が態々鍛えるってんなら、何かしら理由が有るんだろ？」

「さあのう？ヒュ〜ヒュ〜」

すつとぼけた顔で口笛吹いてやがる…。吹けてねえけど。

「…はぁ、しょうがねえなあ。俺様から話はつけといてやるよ」

「うむ、頼んだ」

面倒なことにならなきゃいいが…

いや、こいつと関わった以上面倒事は必然か。

「はあ…」

俺様は、この日何度目かわからない溜息をついた。

「おお、そうじゃ、一つ忘れとったわい」

「何だよ、まだあんのか？」

「ボブル草、寄越せ」

「…てめえ、年寄りからカツアゲして恥ずかしくないのか？」

Offstage・? 火竜王の災難（後書き）

伏線回収は何時になる事やら…

#4 貧乏、宿なし（前書き）

少々熱中症になってしまいました。皆さまも、室内だからと油断せずお体に気をつけて。

10/22 後半大幅修正。 #5も丸々変更予定。

#4 貧乏、宿なし

門を潜った先に設けてあった仮設の検査場で入都審査は行われた。ズラリと並ぶ長蛇の列に長引くかもと覚悟していたが、行われたのは手荷物検査と簡単な質疑応答だけで、街の中に入るのにさほど時間はかからなかった。

荷物を背負い、いざ街に入ろうとすると、南門の警備兵隊長だというアルフレッドさんから声をかけられた。

「お疲れ様。中央道は沢山の人が往来しているから、逸れないように気をつけてね。えー、と」

「あたしはカレン。カレンⅡハートです」

「オレはジーク！ジークⅡホワイトだ！地図ありがとな、兄ちゃん！」

「どういたしまして。困った事があつたら南門に来るといいよ。普段はここで駐在してるから、気軽に声を掛けてくれ。帝都の兵士として出来る限り力になるよ」

どこまでいい人なんだろう。なんか逆に心配になってきた。

「はい、ありがとうございます。アルフレッドさん」

「あ、名前覚えてくれたんだ。嬉しいなあ」

「隊長。顔、ニヤけてますよ」

「その顔の所為でチャラく見られてモテないんすよ？」

「う、うるさいな…」

…そうかな？確かに色黒で右耳のピアスが目立つけど、真面目で良い人にしか見えないけど。

部下につっこまれてアルフレッドさんは少し機嫌を悪くしたようだ。ここはフォローしとくかな。

「そうですか？あたしはアルフレッドさんの笑顔、好きですよ？」

「!!!!？」

あれ、なんか固まっちゃった。
変な事言ったかな？

『（…天然、すか）』

？

何が？

まあいいや。

「それじゃ、お世話になりました。行くわよ、ジーク」

「おう！兄ちゃん達、またなー！」

「お、おう…気をつけてな」

「たいちょうーっ、おーい隊長ー！」

「……（ぶしゅ〜）」

「……だめだこりゃ」

「初心にもほどがあるでしょうに……」

「えーと、取り敢えずは宿探しね。地図によると、一般の宿は南東の本道に密集してるみたい」

門を通って真っ直ぐ行くと、ゴールド城まで抜ける中央道がある。円い外壁に並行するように円形の大通りがあり、帝都中央の城を中心に十字に割る形である東西南北四つの大きな道が中央道だ。

「さすが帝都、活気が違うわね」

中央道に入っすぐ色んな店が立ち並び、道行く人に商売気たっぷりの声を掛けている。

「帝都土産はこれで決まり！バーシル名物帝都カステラだよー！」
「そこのお兄さん！彼女に帝都ご自慢・銀のネックレスはいかが〜」

!？」

「うまいよ、安いよー！南国キエロから直輸入！B.H.^{ブラックホーン}ピッグの串焼きだよー！」

見た事のない物ばかりで目移りしてしまいが、今は宿探しが先決だ。

「うほー！ウマそー！カレン、アレ買おうアレ！」

ジークは屋台の串焼きをかぶり付かんばかりに見つめている。

大きく切り分けられた肉に甘辛いタレをかけ、炭火で香ばしく焼かれた串焼きは、お昼時で小腹の空いたあたしにも強烈に魅了してくる。

じゅるり…

…はっ！

危ない危ない、誘惑に負けるところだった。

「駄目よ。今はお金に余裕はないの」

「ム…」。じゃあ冒険者になって金稼いだら、たらふく美味しいもん食うぞ！」

「（こりゃ稼げるようになっても暫くは食費に苦労しそうだわ…）」

食べる為に働く。…真理ではあるか。

それはさておき、先程気になる言葉が聞こえた。

「…リリー、そういえばさっきの肉、B.H.ピッグって魔獣よね？」

『そうっす。比較的大人しい魔獣っす』

「…魔獣って、食べれるの？」

魔獣の体内には、怒り・憎悪・嫉妬などを増長させる『穢れ』と言われる強い負のエネルギーが蓄積されている。

例外もいるが、基本的にはこれが多い魔獣ほど凶悪かつ強大な力を持っている。

いくら弱い魔獣とはいえ、肉を食べて穢れを体内に取り込むのは些か拙いと思うのだが…

『なんだお嬢、知らねえのか？魔獣が死ねば、肉から穢れは消えるんだぜ？』

え、そうなんだ？

穢れって、もつとねちっこい油みたいなイメージだったんだけど。

『まあ、存在が消えて無くなるわけじゃあないんだがな』

??

どういうこと？

『ま、その内教えてやらあな。それより、民宿街はココを右だろ？』

「へ？ああ、そうだった」

あたし達は地図に従い、民宿街へと向かった。

マジか…

幾らなんでもあんまりだ…

ちくしょう、何で…！！

「何でこんなに高いのよ！！！」

『ま、都会つてのは総じて物価が高いもんさ』

あたしが甘かった。

完全に想定外だった。

まさか帝都の相場がこれほどに高いとは…！

「二人一部屋食事無しで一泊銀貨二枚！？全財産使ったって一週間も泊まれないじゃない！」

あたし達の現在の所持金は金貨一枚。

金貨一枚で銀貨十枚だから、五日分しかない。

これからさらに食費などを差し引くとなると、一泊二泊が限度になる。

『ということはだ。とつとと冒険者になって金を稼ぐほか俺達に道は無いってこった。諦めな、お嬢』

直ぐに報酬の出る仕事なんて冒険者以外に無い。

ちくせう、あわよくば此処で安定した仕事を見つけてひっそり生きていこうと思つてたのに…

ぐぬぬ…

師匠め、何がなんでも安らぎを与えんつもりか…！

『さすがにそこまでイっちゃんも鬼じゃ無いと思つっすが…』

『しかしいくら帝都とはいえ、昔はここまで高くなかったんだがな。物価が上がつてるとなりやあ、ギルド登録にもいくらかかるか分かつたもんじゃねえな。お嬢、三代目、宿は後回しにして先にギルドへ冒険者登録をしに行こうぜ』

『それが賢明っすね』

アインの言う通り、稼ぎ口を優先して確保しておかなくては、最悪の場合は詰みだ。

あたし達は中央道の冒険者ギルドへと向かうことにした。

- 南中央道・冒険者ギルド帝都本部

ゴルド帝国の各地に散在する冒険者ギルド。その本部がここである。横長で無機質な二階建ての建物の中では毎日、ギルド職員が事務処理に追われて忙しく働いている。

だが職務に奮闘する彼らを邪魔する、実に迷惑な輩が偶にいたりする。

「おい小僧、俺が誰だか分かってモノ言ってるのか？潰されたくないやあ、大人しく譲りな」

「ハッ！テメエみてえなヒゲオヤジなんぞ知るかよ。とっとと俺達の後ろに並びな」

受け付けカウンターの前で、緑のスカーフを身に付けた青年らと髭面の大男が睨み合いをしている。

一触即発の雰囲気、ギルド内の冒険者たちは遠巻きに彼らを見つめるだけで誰も止めようとはしない。

「このっ……俺はBランクチーム『鉄血団』のリーダー、鉄槌のバグロー様だ……」

「俺はCランクチーム『新緑の風』のリーダー、ウィンデだ。生憎鉄槌なんて聞いたことねーよ、バーカ」

度重なるウィンデの挑発に顔を真っ赤にしたバグローは、野次馬に

向かって招集をかけた。

すると、人ごみの奥から同じ赤い十字の印されたエンブレムを身に着けた屈強な男達がぞろぞろと集まり、青年達をぐるりと囲い込んだ。

「どうだ小僧、謝るんなら今の内だぜ？」

「……仲間がいたのか」

「ウインデ、Bランク相手でこの人数はやばいって！割り込みされたぐらい、いいじゃないか！」

「るせえ！こーいう子供の手本にならねえ大人が俺が一番嫌いだよー！」

ウインデは仲間の制止も聞かず、バグローを睨みつける。

だがしかし強気なセリフと表情とは裏腹に、ウインデは冷や汗が止まらなかった。

CランクとBランク、一つ違いでもその実力差は天と地ほどもある。まともにやり合って勝てる相手じゃないのだ。

おまけにこの数、青年ら3人に対してざっと20人強。あまりに分が悪すぎる。

「（いまさら頭下げたってってタダじゃ済まねえだろうな。てか下げたくねえ！……だが闘^やるにしても仲間を巻き込むのは……くそっ！）」

幾ら考えても打開策は見出せない。頭に血が昇りやすい自身の迂闊さを呪う事しか出来ずに歯噛みし、ただ眼前の男を睨みつける。

「……どうやら詫^やびる気はサラサラ無いらしい。良い度胸だ……表へ

出な
」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0364v/>

サラブレッド、世に憚る <改訂版>

2011年11月15日15時57分発行